

二つの「中日辞典」

依藤 醇

要旨 『中日辞典』（小学館）と《新汉日词典》（商務印書館）は、日本の小学館と中国の商務印書館という二つの出版社が、共同出版の形でほぼ同時に両国でそれぞれ発行した「中日辞典」である。前者（日本版）は後者（中国版）の原稿をもとに、中国側の了承を得て、日本側が必要に応じて修正・補充を行ない、日本で出版された辞典である。本稿は、二つの辞典の出版の背景を振り返るとともに、日本側が日本の読者の便宜をはかって行なった変更について、いくつかの具体例を挙げながら論じたものである。

キーワード 中日辞典 見出し語 ピンイン 規範 新語

两种“汉日词典”

提要 《中日词典》（小学馆）与《新汉日词典》（商务印书馆）是以日本的小学馆和中国的商务印书馆两家出版社共同出版的形式，几乎同时分别在两国发行的一种“中日词典”。前者（日本版）以后者（中国版）的原稿为底本，在获得中方同意之下，经日方施以必要的修改和补充之后，在日本国内出版。本文回顾了两种词典出版的背景，与此同时就日本方面适应日本读者需要所作的改变，举例进行了阐述。

关键词 汉日词典 词条 汉语拼音 规范 新词

はじめに

本誌編集部より『中日辞典』（小学館）——以下、『中日辞典』と表記——について寄稿するようにとの依頼を受けた。その理由は、私が初版（1992年）、第2版（2003年）、第3版（2016年）のいずれにも編集委員の一人として関わってきたからだと思われる。辞典は多くの場合、共同作業で制作されるものであり、本辞典の完成にも数多くの人が協力している。執筆者やスタッフ、協力者の氏名は記されているが、原則として具体的な担当部分が個別に記されることはない。加えて初版が出てから既に30年になることもあり、私自身も当事者の一人というよりも多数の関係者のうちの一人にしかすぎないというのが正直な気持ちである。そのようなことから、本辞典（特に初版）について論じる場合にも、他の辞典に対するのと同じように、ある程度は客観視して述べられるのではないかと考えている。

本稿は中日両国の二つの出版社が共同出版した『中日辞典』と《新漢日词典》について、出版までの経緯に触れるとともに、日本の読者や学習者の立場に立って考えたとき、どのような配慮が必要とされたかを、両辞典を比べながらいくつかの面から振り返ってみたものである。なお、『中日辞典』の第2版と第3版の改訂については最後に簡単に触れるにとどめた。



『中日辞典』（初版）と
《新漢日词典》

1. 日本（小学館）と中国（商務印書館）との共同出版契約について

『中日辞典』は日本で何種類か出版されている中日二言語辞典の一つである。ただ、本辞典は、日本と中国（日本の「小学館」と中国の「商務印書館」）との国を跨いだ共同出版であるという点でやや特殊な辞典と言えよう。この辞典が生まれた背景を理解するためには、当時の歴史的状況について

二つの「中日辞典」

も触れておく必要がある。今から約50年前の1970年頃から20年あまりの間は、日中両国間のさまざまな分野で、相互交流が盛んになり、それに伴い相手国の言語に対する学習熱も急激に高まった時期であった。1972年には国交が樹立され、1978年には平和友好条約が調印され、そのような流れを一層後押しすることになった。このような時代背景のもとで、1980年頃から、小学館は商務印書館との間で辞典の共同出版に向けての交渉に取り組んだということである。その結果、先ず『日中辞典』¹⁾が、五年遅れて『中日辞典』が、日中二つの出版社による共同出版のそれぞれ日本版として出版されることになる。以上の経緯については『日中辞典』と『中日辞典』の「まえがき」からも知ることができる。

2. 《新漢日词典》について

2.1 出版までの経緯

『中日辞典』（共同出版の「日本版」に当たる辞典）について取り上げる前に、《新漢日词典》（共同出版の「中国版」に当たる辞典）について取り上げたい。《新漢日词典》という書名には最初に“新”の一字が添えられているが、それより十年早く《漢日词典》という書名の辞典が“吉林人民出版社”から出版されている。それが“新”の付いている理由と思われる。“吉林大学漢日词典编辑部”の編集で、1981年5月付の編集部による“前言”によると、国家の外国語辞典プロジェクト（1975-1985）の一つとして編纂されたものということである。日本での販売も考慮され、日本販売用には表紙と奥付を取り替えて、『漢日辞典』という書名で3,800円の定価で販売されてい

1) 小学館は1980年に商務印書館との間で先ず「日中辞典」の共同出版を行なう取り決めを行なった。その結果、中国で《現代日漢大词典》が両社の共同出版の「中国版」として出版され（1987年）、日本では『日中辞典』が（日本側で前者の原稿に必用な修正・加筆等を行ない）「日本版」として「北京・对外経済貿易大学」（「中国版」編集プロジェクトの担当校）を加えた三者の共同編集という形で出版されている（1987年）。『日中辞典』はその後、2002年に第2版、2015年に第3版が発行され現在に至っている。

る（1982年初版）。「株式会社 燎原」が日本発売元となっていた。

一方、《新漢日词典》の“序”には、編纂の経緯が大略次のように記されている。1960年代の初めに、商務印書館は、《現代汉语词典》に依拠して中国最初の“漢日词典”（収録語数4万余）を編纂し、校正刷りが出される段階にまで至ったが、文化大革命で出版を断念せざるを得なかった。1975年になり、外国語辞典に関する中国の国家プロジェクトの一つとして吉林大学で《漢日词典》が編纂されることとなった。商務印書館は、かつて出版直前まで作業が進んでいた“漢日词典”を、参考資料として“吉林大学漢日词典编辑部”に提供したとのことである。その後、商務印書館で改めて“漢日词典”を編纂することになり、やはり《現代汉语词典》に依拠し、《新华字典》《国语词典》《現代汉语八百词》等を参照し、収録語数8万余、用例6万の《新漢日词典》を完成させたと述べられている。

2.2 《新漢日词典》の読者対象は

日中辞典や和英辞典などに日本語母語話者が求めるのは、日本語から中国語や英語への訳語、その使い方が理解できる用例が収録されていることである。一般には日本語についての解釈や文法的な解説までは求められていない。《新漢日词典》は中国の読者にとっては、私たち日本の読者にとっての日中辞典に該当する辞典である。収録語数、中国語に対する適切な日本語訳の充当、必要な用例の配置などから見て、規模と質の両面でそれまでで最大最高の“漢日词典”であると言えよう。日本語部分での仮名の多用は、私たち日本語母語話者にとっては過剰とも思えるほどであるが、これは中国語母語話者にとっての日本語の漢字の読み方の難しさを示すものであり、教育面、実践面での効果を考えて意識的に取られた処置であると思われる。

《新漢日词典》にはもう一つの大きな特徴がある。日中の共同出版契約で「原稿作成」は中国側が担当することになり（日本側は「組版」担当）、日本語母語話者も読者対象となる原稿となっていることである。そのため、日本の読者への対処も必要となり、虚詞（機能語）などに対する詳しい文法説明や、文化や習慣の違いで日本人には分かりにくいと思われる言葉への説明

なども一定程度追加されることになる。中国語母語話者にとっての“漢日词典”と、日本語母語話者にとっての「中日辞典」の両方を追及した、ある意味で欲張った辞典ということになる。もちろん、両国の読者のどちらにとっても必要とされ、役立つ情報というものもある。例えば、日中同形語や同一の成語で意味が異なるものなどについての指摘は双方にとって有益なものである。

3. 『中日辞典』での修正・補充について

『中日辞典』の「まえがき」の中では「……中国側担当の原稿の内容と質が本辞典の質を基本的に保証している……」と述べられている。これは《新漢日词典》（正確にはその原稿）に対する日本側からの敬意と信頼、高い評価を表すものである。一方、日中両国の文化・習慣や社会制度の違い、長期にわたる両国間の交流の断絶、両国の外国語教育・学習のやり方や実情などから、中国側作成の原稿そのままを日本側で採用することができなかったのも事実である。中国側原稿で日本の読者への配慮が相当程度払われていることは随所に見られるものの、それでもまだ十分とは言えず、日本側による修正・補充が、中国側の理解を得て進められることとなった。以下、発音表記と名詞の問題を中心に、具体例を挙げながら、日本側にとって何に変更や追加の必要が感じられ、どのような修正・補充がなされたかについて触れてみたい。

3.1 見出し語にピンイン（漢字は補足的に後ろに）を採用

日本の多くの「中日辞典」（「中国語辞典」という書名のものも含む）は、親字（見出しの漢字）とその解説の後に、その漢字を先頭にもつ漢字表記の見出し語が発音順に配列されており、一見したところ（縦書きと横書きの違いはあるものの）「漢和辞典」と同じような体裁となっている（《新漢日词典》も同じ形式である）。これに対し、『中日辞典』では、親字の下の見出し語については、ピンイン（ローマ字）を前にし、漢字は後ろに置かれてい

る。書体の選択も関係していると思われるが、前に置かれたピンインが目立ち、後ろに置かれた漢字は補足的な感じである。結果として、従来の漢和辞典方式のものと比べて、多くの読者に対し斬新なイメージが与えられたのは事実のようである。出版直後、ある人から「明るい感じがするね」と言われたことを覚えている。実際には、編集部としては斬新なイメージを得ること自体よりも、当時の中国語教育の実情に少しでも合わせられるのではないかというのが、新方式採用の主な目的であったと思われる。ピンインを用いた発音教育が、それ以前に比べて急速に重視されるようになってきていたからである。発音が分かっている場合には、検索に際しても、アルファベット順に配列されているピンインは見やすく、より早く目的の語に到達できるように思われる。

ピンインを見出し語に用い（後ろに漢字も配されているが）アルファベット順に配列した辞書類は他にもある。中国出版の語彙集《汉语拼音词汇》²⁾、日本の『岩波中国語辞典』³⁾、一部の小型の学習辞典⁴⁾などが挙げられる。これらはいずれも親字は立てず、すべての見出し語を完全にピンインで表記し、アルファベット順に配列したものである（ピンインの後ろに漢字も置かれている）。単音節語（漢字では原則として一字で表される単語）も含め、すべてが見出し語として配列されており、英和辞典方式とも言える体裁となっている。

『中日辞典』では単音節語は基本的に親字の解説の中で扱われることになり、それ以外の親字の下に並ぶ見出し語とは異なる扱いになっている。その意味では一貫性に欠けるとも言えよう。しかしながら、「単音節孤立語」の性格が強く、造語成分（語素）の説明も大切とされる中国語では、漢和辞典方式が有効な方式であるとされるのも理由のないことではない。同じ漢字で始まる見出し語のすべてが、一つの親字の下に一括して置かれているという

2) 初稿（文字改革出版社，1958年）、重编版（語文出版社，1989年）

3) 倉石武四郎著，岩波書店，初版1963年

4) 上野恵司著『標準中国語辞典』（白帝社，1991年）、相原茂編著『はじめての中国語学習辞典』（朝日出版社，2002年）

のも何かと便利である。英和辞典方式のように、すべてがアルファベット順に配列されると、同じ漢字で始まる見出し語が分散し、時には何ページも離れた位置に置かれるということも少なくない。中国語の発音が分からない漢字を調べるには、伝統的に部首索引や絵画索引が利用されているが、それとともに簡単に手っ取り早く利用できるのが音訓索引である。親字を立てる方式の日本出版の中国語辞典のほとんどで採用されている。これは日本語母語話者が中国語を学ぶ場合の便利な検索のツールである。《新漢日词典》では採用されていないが、《中日辞典》ではもちろん採用されている。

見出し語でピンインを前に出したことは、同じ原稿から出発した『中日辞典』（日本版）と《新漢日词典》（中国版）が、一見したところまったく関係のない二つの辞典のように見えることとなった。いずれにしろ、この方式の採用に対するいろいろな意見も含め、反響は関係者の予想を上回るものであった。

3.2 発音表記についての規範と現実

《現代汉语词典》は初版が出て以降、いつの時代にあっても中国語の規範を示す辞典であり続けている。国内外を問わず、辞典編集でもいろいろな面で最大の拠り所とされている。《新漢日词典》の発音表記についても、編集作業時点での最新の《現代汉语词典》に従っていると考えられる。『中日辞典』についても、それは基本的には同様である。しかし、発音表記では（そのほとんどが声調表記についてであるが）、《新漢日词典》と『中日辞典』とで一部について異同が見られる。いくつか具体例を取り上げてみたい。

《新漢日词典》では、“宝宝”（子供に対する愛称）、“成绩”（せいせき）、“古迹”（こせき）、“骨头”（ほね）、“一会儿”（ちょっとの間、しばらく）のピンインによる発音表記は、それぞれ“bǎobǎo”、“chéngjì”、“gǔjī”、“gútou”、“yīhuìr”となっている（各単語の後ろの日本語訳は《新漢日词典》による）。『中日辞典』ではこれらについて、発音表記が異なるもの、補足説明（括弧に入れて示した）が加わるものがある。上記の例についてはそれぞれ次のようになっている。“bǎobǎo”（“báobao”と発音されること

もある)⁵⁾、“chéngjì” (“chéngjì” または “chéngjī” と発音することもある)、“gǔjī”、“gǔtōu” (“gútōu” と発音することもある)、“yīhuīr” (“yīhuīr” と発音することもある)。

1985年12月に中国で《普通话异读音表》の改訂版が発表された。『中日辞典』ではそれを反映させることができ、“成績”、“古迹”、“骨头”の見出し語のピンインを“chéngjì”、“gǔjī”、“gǔtōu” とすることとなった。一方で、見出し語に採用した発音とは異なる発音も、現実に存在するのは事実である。新たな規範が示されたとしても、それ以外の発音が一夜にして消滅するわけでもない。その後も存在し続ける可能性もあるので、『中日辞典』では上記のような補足説明の形でそれらを示した。第2版、第3版でもこれらは引き継がれている。以上の用例について言えば、《新汉日词典》が規範(変更前の旧規範ということになるが)に忠実に従った発音表記のみを採用しているのに対し、『中日辞典』は規範(変更後の新規範)に従いながらも、現実にも配慮して柔軟に対処しようとする姿勢が見られると言えよう。

以上は声調の問題であったが、“谁”の発音についても簡単に触れておきたい。《新汉日词典》では、音節“shéi”のところで親字“谁”について解説することはしない。ただ、「“shuí”の別音」とのみ記し、音節“shuí”の部分参照させている。“shuí”のところを見ると発音は親字に「“shuí; shéi”」と二つの発音が併記され、その後ろに解説が置かれている。『中日辞典』では“谁 shéi”のところでは「“谁 shuí”の口語音」とのみ記し、“谁 shuí”を参照させている。“谁 shuí”のところで親字の解説が行なわれ、発音上の注意事項として、「“shuí”と発音するのは書き言葉か公式の場合で、話し言葉で生き生きした表現のとき、特に単音節の場合は“shéi”と発音する」との説明がなされている⁶⁾。

5) “bāobào”については、第3版になって“bāobao”と改め、補足説明は削除されている。

6) 1985年12月に《普通话异读音表》の改訂版が発表されて以降、“谁”の発音が従来の「“shuí; shéi”」から「“shéi; shuí”」へ、つまり(どちらの音も認めるが)はっきり言えば、“shéi”が通常の音であるということになった。その後、数年かけて、《新华

《新汉日词典》の原稿では、“誰”についても、《普通话异读词审音表》改訂版の内容が反映されていないようであるが、時間的に間に合わなかったこと、《现代汉语词典》でも改められるまで数年を要していることなどが理由であると思われる。『中日辞典』については注6)で述べたとおりである。

3.3 文法について

文法についても簡単に触れておきたい。『中日辞典』が文法面で主に依拠したのは、《现代汉语词典》や《新华字典》を除くと、当時日本の中国語教育でも広く利用されていた《中学教学语法系统提要（试用）》⁷⁾と《现代汉语八百词》⁸⁾であった。

文法術語の使用は可能な限り減らすとともに、“能愿动词”は「助動詞」に、“连词”は「接続詞」に、“定语”は「連体修飾語」に、“宾语”は「目的語」になど、文法術語を用いる場合にも可能な範囲でより親しみやすい日本語が充てられた。一方、量詞や補語など日本の読者にとって習得が困難で説明の必要度も高いと思われるものについては、場合によっては囲み記事による説明も加えながら、できるだけ詳しく分かりやすい記述になるよう注意が払われている。

品詞の全面的表示については、初版編集段階でももちろん検討はされたが、結論的に言えば時期尚早ということで断念された。《新汉日词典》はもちろん、当時最新版の《现代汉语词典》も、名詞、動詞、形容詞については品詞表示がされるには至っておらず、日本の教育の現場でも必ずしも品詞認

字典）や《现代汉语词典》にもそのことが反映されていく。親字の解説や“誰”で始まる見出し語もすべて“谁 shuí”から“谁 shéi”のもとへと移される。『中日辞典』でも第2版で同様な変更がなされた（初版で根本的な変更がなされていないのは編集上の制約によるものと考えられる）。発音上の注意事項にも少し変更が加えられ、「本来の“shuí”という発音は、むしろ書き言葉か公式の場合に限られ、通常は“shéi”と発音される」となっている。何はともあれ、二つの発音が存在する以上、とりわけ日本の読者には、両者の違いの説明が必要とされる。

7) 人民教育出版社中学语文室, 1981年

8) 商务印书馆, 1980年

定で意見が一致しているとは言えない状況にあったことが一つの大きな理由であった。もちろん、私たちの力量の問題もあったことは否定できない。品詞表示の問題については、「凡例」で次のように述べられている。「名詞、動詞、形容詞については、その品詞名を記していない。ただし、訳語と用例でその文法上の機能が明らかになるよう努めた。」なお、それ以外の品詞については基本的にすべて記されている。

文法用語などで必ずしも中国側原稿に拠らなかった部分はあるものの、用例の利用をはじめとし、文法面でも中国側作成の原稿に大いに助けられていることは付け加えておきたい。また、文法面に限らないが、修正・補充作業に際して、《現代汉语词典》、《現代汉语八百詞》等の商務印書館の出版物の利用が認められていたことには大いに助けられた。

3.4 同じ漢字でも……

同じ漢字で表されていても日中で意味が微妙に異なるということは少なくない。そのような例を2例だけ取り上げたい。かなり以前のことであるが、中国のある新聞記事の中で「神戸市兵庫县」と書かれているのを見たことがある。「市」と「县」について、《新漢日词典》ではそれぞれ「し」、「けん」と日本語訳を挙げるのみであるが、『中日辞典』ではそれぞれ「市」「県」と訳語を挙げた上で、「中国の“县”は日本の「県」よりも行政レベルが低く、規模が小さい。中国全土に約2千ある」との補足説明が加えられている。

中国語の“水”は「水」でもあり「湯」でもある。このことは、中国語を学んだ多くの人が知っている。『中日辞典』でも「“水”は日本語の「水」とは異なり、……冷たくても熱くても“水”を用い、温度の概念は含まれていない」との注意事項が記されている。《新漢日词典》では日本語訳は「みず」のみで、用例で“开水”（沸いた湯）、“温水”（ぬるま湯）、“茶水”（（入れた）お茶）、“打水”（水（または湯）をくむ）などが挙げられているが、それ以外に特に注意事項のような記述は見られない。中国語母語話者にとっては、“水”は「水」や「湯」や「お茶」のすべてを含む総称として理解されており、必要に応じて、“开水”、“温水”、“茶水”などと区別して表現をするだ

けのことである。日本語母語話者にとっては「水」は「水」、「湯」は「湯」であり、総称としての“水”は理屈ではわかっている、感覚的に理解するのは容易ではない。このような場合、いろいろな場面で用いられている実際の用例にできるだけ多く触れることが必要なのかもしれない⁹⁾。このほかにも日中で意味が大なり小なり異なる漢字は少なくないが、“里”と「里」、「斤」と「斤」などの単位を表す言葉にはとりわけ注意が必要である。

3.5 日本側で追加した新語や追加説明など

日本側の執筆編集作業が集中的に行なわれていた1980年代の後半は、中国社会の変化が大きく、外来の事物などを表す多くの新語が、中国社会の中で定着しつつあった時期である。日本側の編集作業で新たに追加することになった語も少なくなかった。いくつか例を挙げると、“方便面”（即席ラーメン）、“汉堡包”（ハンバーガー）、“卡拉OK”（カラオケ）¹⁰⁾、“可口可乐”（コカ・コーラ）、“三明治”（サンドイッチ）、“生鱼片”（刺身）、“微波炉”（電子レンジ）、“洗手间”（トイレ）、“信用卡”（クレジット・カード）“T 恤衫”（Tシャツ）などである。これらは《新漢日词典》には収録されていないが、『中日辞典』で収録されたものである。

《新漢日词典》では驚くほど達者な日本語が数多く使われていることにも一言触れておきたい。“京油子”（すれた北京人；海千山千の北京人）、“酒鬼”（のんだくれ；のんべえ）、“老不死”（死にぞこない）、“他妈的”（くそ；

9) “打水”や“打盆洗脸水”の“水”が「水」なのか「湯」なのか、このフレーズだけでは分からない。時代や地域や気候、さらには使われる具体的な場面まで限定された上でなければ、これらのフレーズは正確には訳せない。興水優氏による次の例は場面ははっきりしており、“水”が「お湯」と訳される例である。“打水去？”（お湯をくみにいくの）というもので、これは40年余り前の北京大学構内で、朝の日課として魔法瓶を提げてボイラー室にお湯を取りに行くとき、出会った顔見知りの人からかけられた挨拶代わりの言葉とのことである。（興水優 『中国語基本語ノート』大修館書店1980年）

10) 『中日辞典』では“卡拉OK”の見出し語のピンイン表記は“kāláOK”となっている。《現代汉语词典》の発音表記は“kālá' ōukèi”（修订第3版1996年）→“kālá-OK”（第5版2005年）→“kālá OK”（第6版2012年）と少しずつ修正されて現在に至っている。

ちくしょうめ)などは罵語とも言うべき言葉で、外国人である私たちにはとりわけ理解するのが難しく、与えられた的確な日本語訳には大いに助けられる。このほかにも、「しぶりばら」「せとびき」「膳立て」「にしきめがね」「豆素麺」など、私たちが今ではあまり耳にしなくなっている、日本語らしい日本語が多数使われていることには驚かされる。もちろん「メリケン粉」「べっぴん」など修正すべきものも見られるが。

初版についての最後に、補足説明が必要と思われる場合があることについて、いくつかの例を見ておきたい。中国固有の事物を表す語、中国の社会や文化に関わる語などについても、《新漢日词典》では、多くの場合に要点を踏まえた丁寧な解説が与えられている(政治や思想と関わるものについてはもちろん中国の立場が考慮されている)。一方で、しばしば目にしたり耳にしたりすると思われる語ではあるが、中国語の漢字を日本語読みするだけで済まされているものがある。例えば、“馒头”、“饺子”、“国务院”、“人民代表大会”、“人民公社”、“大跃进”については、「むしパン；マントウ」、「ギョーザ」、「こくむいん」、「じんみんだいひょうたいかい(中国人民が権力を行使する機関)」、「じんみんこうしゃ」、「だいやくしん；大きな躍進」とほとんど直訳のような訳語(一部に簡単な補足説明もあるが)が与えられているのみである。両国民が共に漢字を使っており、これらは常用されている語でもあることから、十分理解できると考えられたのであろうか。『中日辞典』では、これらすべてに何らかの補足説明が加えられている。辞典にはスペースの制約もあるが、重要な語であればあるほど、正確な理解のために最小限の補足説明が欠かせないのではなかろうか。

4. 改訂について

辞典には一般に改訂が欠かせない。理由の第一は、どんなに注意して執筆し編集作業を行なったつもりでも、間違いは生じるものである。また、それを見逃してしまうことも避けられないからである。間違いを見つけたら、なるべく早い機会に訂正しなければならず、それが改訂に際して真っ先に対処

すべき対象である。第二に、文字、発音、文法などに関する新しい規則が定められることがあれば、必要に応じてそれを反映した修正が求められる。第三に、社会の変化にともなって生まれた新語のうち定着したと思われるものは収録しなければならない（同時に削除対象の語も生じるが）。変化が激しい時代には言語環境の変化も大きく、毎年のように多くの新語が生まれる。辞典の本文以外でも、各種コラムや付録の百科項目などについて、必要に応じて大小の改訂が必要になり、それぞれ各分野の専門家の方々に協力を仰ぐことも必要である。小学館で最初の段階から責任者として中国側との交渉に取り組み、『中日辞典』（初版）の担当もされた S 氏が、「辞典は改訂がされなくなったら死んでしまう」と言われていたことが記憶に残っている。中国語だけでなく多くの辞書の編集や改訂に携わった経験を有する方の発言だけに言葉の重みを実感させられたものである。最後に、二回行なわれた『中日辞典』の改訂について簡単に触れておきたい。

4.1 第2版について

第1版から11年が経過して第2版（2003年）が出る。20世紀末から21世紀初めにかけての10年間にも中国社会は大きく変化した。第2版では重要と思われる新語を中心に約1万5千語が追加されたが、多くが中国社会の急激な変化を反映するものである。分かりやすい例をいくつか取り上げると、“便利店”（コンビニエンスストア）、“超市”（スーパーマーケット）、“打印机”（プリンター）、“欧元”（ユーロ）、“沙尘暴”（砂あらし）、“手机”（携帯電話）、“鼠标”（マウス）、“条形码”（バーコード）、“游乐园”（遊園地）、“拜拜”（バイバイ）¹¹⁾、“打的”（タクシーを拾う；タクシーに乗る）、“的士”（タクシー）¹²⁾などが新たに加えられている。学習辞典としては、第2版では

11) “拜拜”の見出し語としての発音表記は第2版では“bàibai”となっているが、発音上の注意事項で「実際は“báibái”や“báibai”と言うことが多い」と説明。第3版になり、見出し語の発音表記が“báibái”となる。

12) “打的”、“的士”の見出し語としての発音表記は第2版ではそれぞれ“dǎ//dǐ”、“dìshì”となっているが、発音上の注意事項で、それぞれ“的”は実際には“dì”と第1声で

日中両国の資料を参考に新たに重要語を3段階に分けて表示している。学習者の便宜を図ったものである。

4.2 第3版について

第3版(2016年)では初版以来の課題とされていた名詞、動詞、形容詞も含めた品詞の全面的表示が実現された。初版以来、直接間接に参照してきた《現代汉语词典》が第5版(2005年)になって初めて全面的な品詞表示を行ない、それを参考にすることができた。2013年には《通用规范汉字表》が公布されたので、それに基づいて親字約600字を追加するとともに、そこに収められている8105字については、一級字～三級字の別も表示した。第3版でも引き続き新語など約8000語が追加されている。“超级计算机”(スーパーコンピュータ)、“二维码”(QRコード)、“非典”(新型肺炎; サーズ)、“薯条”(フライドポテト)、“高铁”(高速鉄道)、“雾霾”(スモッグ)、“雪上技巧”(モーグル)、“炸鸡”(フライドチキン)などがその例である。

おわりに

本稿で取り上げたのは次の二点であった。第一に、『中日辞典』がどのような歴史的背景の下で、どのように編纂された辞典であったかを振り返ってみること。第二に、日本の読者を対象としたとき、中国側作成の元原稿に対して、どのような修正・補充が必要とされたかを考えてみることであった。結果から言えば、とくに第二の問題については、限られた範囲で少数の具体例を挙げて論ずるにとどまった。いつか機会があれば、より広い範囲で内容的にもさらに深めた考察を行ないたいと考えている。

依藤 醇 Yorifuji Atsushi 東京外国語大学名誉教授 専門：中国語学

読まれる」、「実際には“dishi”と発音される」と説明。第3版になり、見出し語の発音表記がそれぞれ“dā//dī”、“dishi”となる。